



Convivial Design Forum - Fall Session -

本領発揮のためのデザイン

自律協生スタジオ「コンヴィヴィ」は
共にいきる喜びに満ちた社会の実現を目指して
研究・実践・創造する産学協働の拠点です。

課題より可能性に目を向け
見過ごされてきた宝に光と役割を与え
ドキドキ、ワクワク、ハラハラしながら対話し、
表現をし、力を合わせて
新しい風景をともに創造しましょう。





自律協生スタジオの一年

「自律協生スタジオ (Convivial Design Studio)」の開設からちょうど一年が経過した。「コンヴィヴィ」の愛称で親しまれるようになったこの共同研究拠点は、デザインやアートの力をあまねく社会に価値提供できるものになりたいと考えていた武蔵野美術大学と、社会課題の解決にはデザインやアートの力が欠かせないとの認識を深めていた日本総研との出会いから生まれたものだ。

両者の関係は、「政策のデザイン」を研究することから始まった。より関係を深めていこうと議論する中で、拠点を構えて共同研究するアイデアが生まれ、「自律協生社会の実現」をテーマとすることとなったのである。

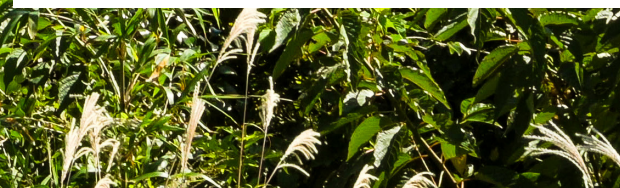
自律協生社会とは、自律的・主体的な個が他と力を合わせることで実現する、生き生きとした関係と喜びに満ちた社会のことを言う。力を合わせる相手には人間のみならず、自然や機械（テクノロジー）も含まれる。

なぜ自律協生が必要かと云えば、多様な個に居場所と出番があり、それぞれがそれぞれに本領発揮できる社会を実現する必要があるからだ。人口が減る一方のこれからの日本社会が目標とすべきは、出生率の向上でも一人当たりGDPの増加でもなく、個の本領発揮である。除け者にされたり、支配下や抑圧下に置かれたり、立ち止まったまま進めずに自らを閉ざす状況に陥ったりすることなく、誰もがその持てるポテンシャルを十二分に発揮して生きられる社会。そういう社会を実現するために最低限必要となる条件が自律協生だ。

では、どうすればそれは実現するのか。

そのヒントを探しに、私達はまず地域に分け入った。なぜ地域かと云えば、そこには暮らしを自らつくるべく、力を合わせて生きてきた人々がいるからだ。地域社会は多様な個に居場所と出番を与える工夫に満ちている。その一方で、公共事業や補助金に依存してきた経済構造は自律を蝕み、縦割りが協生を阻む状況を生んでいる。学べる部分と変えていかなければいけない部分とを併せ持つ地域社会は、実践しながら探求するのに、最適な舞台である。

自律協生スタジオは、まずは3年間でどれだけのことができるかを試してみようということで始めた。最初の1年間を終え、まだ成果と言えるものは乏しく、ようやく進むべき方向性が見えてきた段階だ。とはいえ、既に複数の研究プロジェクトが立ち上がり、自律協生社会実現へのアプローチは、確実に広がりを見せている。自律協生スタジオの本領発揮が試されるのはこれからだ。



自律協生社会の実現を目指して

人や自然やテクノロジーとの関わりの中で、個人の主体性や創造性が発揮される、生き生きとした喜びに満ちた社会のことを自律協生社会（Convivial Society）と私たちは呼びます。武蔵野美術大学と日本総合研究所は、昨年度からこの自律協生社会を実現するための共同研究を行なっています。ここではプロジェクトを統括する若杉教授と日本総合研究所の井上氏が、リサーチのなかから見えてきた課題について探ります。

武蔵野美術大学 教授

若杉 浩一

株式会社日本総合研究所 エクスパート

井上 岳一

都市と地方、専門家と市民の格差を超えて

井上 若杉さんはシンクタンクと組むってなったときにどう思いました？

若杉 僕が広告代理店とシンクタンクが嫌いな理由は、一つは地元の人からすると都市の英知を振りかざして「確かにそういうのが必要だね」って思い込ませて、その知的量産モデルで地域を思考停止状態にしてしまうから。それでやった気になると、今度はそれに依存してしまうわけですよ。これは破壊的だと思ってずっと思ってたんです。東京から見ればこっちの方が豊かに見えるのに、自分たちの美意識を自ら破壊していくっていうようなことが、全国で起こっている。

井上 デザイナーも似たところがありますよね。

若杉 そういった意味ではそうですよ。デザインやクリエイティブもある種の危険性を帯びてるんですよ。

井上 シンクタンクやコンサルティングって「知識の格差」を利用して生きているところがあって、それは都市と地方の格差を利用して、都市の連中が食ってるっていう構図そのままなんです。 “ デワノカミ ” 的に、「海外では」「最新の理論では」と、とにかく最先



端の知識を得てそれである種の脅しをかけるっていうのが一般的なシンクタンクやコンサルのモデルですよ。それは、東京が地方に対してもっと東京的にならないと駄目だと言ってきたのと全く同じなわけです。僕自身は、ただ知識を与えるだけではなくにも変わらないってことを痛感してきたのですが、デザインには物を売れるようにするとか状況を動かす力、マジックを起こせる可能性がありますよね。知識ではそういうマジックは起こせないんです。

若杉 なるほど。

井上 知識を授けるモデルをやめて、一緒にものを考えるモデルにしてから少し楽しくなったのだけど、一緒に考えてるだけではその先を動かせない。その先を動かす時には形にする力が必要で、それがデザインの強みだと思うんです。社会が課題を抱えてる中で、状況を変えなきゃいけないというときにデザインやアートの力が欲しかった。話し合ってるだけでなく手を動かしながらだとまた状況が変わってくるということもあるから、つくれる人と一緒にやりたかったんです。

若杉 さっきも学生と、どうやってたその地域の人たちの美意識や自己肯定感、あるいはコミュニティが生成されるのかみたいな話をしたときに、何か一緒に物をつくったり、一緒にご飯食べたりみたいなことの中で、一体感とか共感が生まれることが多いですよ。ね

て話をしていて、本当にそうだと思うんですよね。こうすれば共感が得られるんだみたいな知識よりも、自分たちの活動の中から得られた実感が一番強い。本来は地域はそういう経験を持っていたはずなのに、経済を優先するがゆえに失っていったってことなんだと思います。

井上 それは企業も同じで、一つの企業の中でも考える人と現場の距離が離れ、業態も細分化されてしまった。システム化が進んだがゆえに、一緒に考えて手を動かし、何かを実現していくということが失われてしまったというのはありますよね。

若杉 なにをつくるにしても、誰かに手を借りなきゃいけない構造になってしまっていて、共同体もないからお金で解決するしかなくなってしまってる。昔は地域に大工の棟梁がいて、仕入れも全て地域で賄えたわけじゃないですか。それが、自分達の暮らしすら自分達でつくれなくなってきた。

井上 地域を盛り立てていきたいというのはもちろんあるけど、別に地域だけではないんですよ。人口が減っていく中で、都市部だって官と民と産業界が新しい共同体を作り新しい役割分担ができるように変わっていかないといけないときに、みんなその変わり方がわからないから、小さくてわかりやすい単位で実験みよう。そういう意識で地方の町に入っているわけで。

若杉 その通り。大きな組織を動かそうとすると年月ばかりかかるから、自分たちでものをつくっていくプロセスを実体化できるのは、ある程度小さなユニットなのではないかと思っています。

井上 僕が今苦戦してるのは、小さいユニットの受けの悪さ。例えば地方の小さな町でやります、というのはあんまり受けが良なくて、これが政令指定都市になると途端に反応が変わる。今僕は小さいけど具体的な形を起こしていくということに価値を感じてるけど、それは評価されにくい。企業や政府は、より大きな成果を見せたがるという一発逆転の性向があるから、その考えはどうやって変わったいくのかなというのは悩みますね。

若杉 井上さんも言ってるけど、最初でドーンとお金をもらうのではないのだと。最初に計画したものは、ある種のエンジンで、それだけ残してさよなら〜っていう話じゃなくて、それが人を乗せて自走し続けなければならない。そこでのフィーは小さくても、時間軸で考えればちゃんと対価を得られるし、多分そのモデルはネットワークされていくんですよ。そのときにそのネットワークをきちんと持つてるところが一つの強みになっていくだろうなと、僕は思ってるんですけどね。

井上 それが僕らの言う、“Small Business, Big Relation” で

すね。

自己表現できる場の重要性

井上 アートやデザインがいいのは、大抵のエリート層はそこに苦手意識をもっているということです。直接的な身体性を伴った表現が苦手だから、絵が描ける人に対してめっちゃ憧れを持ちやすいし、言葉や数式の勝負では対抗意識を持っちゃうけど、絵が描ける人には無条件に感心するし、肯定しやすい関係性になれると思うんです。

若杉 僕はデザイナーとして地域に行ったときに、自分が絵を描いてしまうことの問題を感じていて、地元の人からすると何かを表現してくれんだと期待されてしまう。なので途中で筆を止めて、あなたたちが描いてくださいよと言う。正直言って僕が描く方が、速度もクオリティも上なんですけども。そういうことじゃなくて、自分達がつくったものだから大切にしたいって思う、そのことの方が遥かに自走するエネルギーになるはずなんです。素人がつくったものってダサいって思われるかもしれないけど、彼らが生み出したものは時間をかけて洗練されていくんですよ。

井上 本当そうですね。今日本総研の若手を天草に連れていってるんだけど、彼らは資料をつくってくださいという誰よりも早く資料作れるんですよ。それを地元の人の前で読み上げるんだけど、誰も聞いてない（笑）。圧倒的な情報量で思考停止させてしまうんですよ。やっぱり上から知識を授けたり、資料を作る癖が抜けないんです。ただそういう部分もこれから現地の人と一緒にやっていくうちに変わっていくし、地域の側もより主体的に関わってくるようになるのだろうなと。そうなったときに初めて、誰が上でも下でもない、お互いにともに力を合わせながら動く、自律協生的世界になっていくんだと思います。今は都市と地方、プロとアマチュアの間でやっているそういう動きを通じて、行政と産業界と市民の間にある壁を崩していきたい。

若杉 そうそう、それやりたい！

井上 ただ、なかなか役所がついてこないですよ。

若杉 役所というか、なんか自分を「封印している」人がいる（笑）。自分らしさっていうのは封印しないと、組織内ではうまく立ち回れない。だから自分の主義思想を封印する。だけど、同じ思想をもった人たちが現れて一緒にやるかってなれば、その封印から解放されるんですよ。どうやってたそういう機会をつくっていけるのかっていうのも課題ですね。

井上 そうなんですよ。僕も含めて受験勉強をしっかりとやってき

た人たちは、正解かどうかわからないものは怖くて手が出せない。正解のものしか提出してはいけないと思ってるから、自分を表現するというのがなかなかできないんですよ。

若杉 ああ、それはあるかもしれん。

井上 役所、官僚機構は失敗を許さない、正解だけで成り立っている場所。そこで自分を表現して踏み外してしまったら、お前は失敗作だと言われる。だからみんな品行方正な振る舞いをして、その実どこかで自分を押し殺しているんじゃないですかね。もっといい意味で公私混同するべきなんだけど、そうすると後ろ指を指されて出世できないし、マイノリティになっちゃうという構造が企業社会にもあります。自律協生的な社会は、自己を表現しながら生き生きといういろいろなものと関係をつくって生きていこうという社会なわけで、それを実現しようといった時に心の問題は大きいと思う。

若杉 それは大きい。稚拙でもいいから、表現するのが楽しいと思えるような場づくりが重要ですよ。

ローカルコレクティブの可能性

井上 この前うちの学校に行っていない小6の息子と2人で話して、彼は学校に行くことに不安を感じていてなかなか一步を踏み出せない。でもさ、自転車だったら何度転んでも立ち上がって漕ぎ始めるよね?って訊いたら、それは、体の傷は大したことないからって言うんですよ。要は、心の傷に対する不安が大きい。やっぱりみんな傷つくことを恐れてるんだけど、表現者の人たちはそこと闘いながらやっていくわけじゃないですか。どうやったら不安を乗り越えられるんだろう?

若杉 僕ら表現者は、逃れたくてもそこから逃れられないですよ。自分の作品やデザインも自分自身なんだけど、つくっているプロセスのなかで、批判や売り上げ、あるいはクライアントの評価もついてくる。そういった意味で常に自分をさらけ出していることは大きいかもしれないですね。

井上 学生はまだ表現を始めたばかりじゃないですか。そういう子たちが恐れずに自分をさらけ出していくには何が必要なんだろう?

若杉 単純な話で、自分で選んで表現したものを、相手が受容してくれたっていう喜びです。つまり、自己をさらけ出し、それを受容してもらえた喜びによって、主体性が芽生える。だから学生には大学時代にそういう経験の一つでもしてもらえたら僕は思ってるんですけどね。

井上 人間が恐れずに自己表現していくようになるにはそういうも

のが必要だとしたら、いろいろなコミュニティのしがらみで自己表現できずにいる人たちを解放するにはどうしたらいいんでしょうね。

若杉 井上さんの言葉を借りると、寺子屋とかローカル・コレクティブみたいなものに可能性があると思います。要は、自分の組織じゃないもう一つのコミュニティの中で、自分の本質的なスキルや可能性が受容され、そこの中で強い自己肯定感が生まれていくような気がするんです。

井上 地域に出ていっているムサビの学生を見ると、「旅の恥はかき捨て」的なところを感じます。自分の普段所属してるコミュニティではないところだから、無責任というか自由になれる部分がある。演劇の舞台でなら恥ずかしげもなく演技できるというのと一緒に、違う舞台を与えられたときに、普段の役割から自由になると。

若杉 そうです。一つのフィールドしかなかったら、そこで失敗したら終わりじゃないですか?だけでも一つのフィールドでは、馬鹿な自分をさらけ出してみんなに受け入れてもらって自己肯定感が高まっていき、「ひょっとしたらこれもありかも?」みたいなもう一つの自分が立つっていうことが重要な気がするんですよ。

井上 「お祭り」って結構それに近かったんじゃないかな?普段はボンコツな人が神輿の上に乗って踊り狂って「すげえ!」みたいなことあるじゃないですか。でも今そういうものがなくなっちゃって、全てがシステム化されてる。そうすると、都会の学生が地域に行って違う舞台で羽ばたいていくというモデルはあっても、地域の官僚や企業の人は羽ばたけなくて鬱々としていますよね。そういう人たちに違う舞台を与えるにはどうしたらいいんだろう?

若杉 一つは、例えば、自分たちのなりわい以外の場所にもう一つフィールドをつくるっていうのがありますよね。ひょっとしたらその地域の中では羽ばたけないってなったら、場所を変える必要があるかもしれないし、同じ場所でも俺たちみたいな外野がいる場所では羽ばたけるかもしれない。こういう異種との交流や表現が繰り返されるフィールドが絶対必要なんです。「どっかで転んでも、どっかで受け入れられる」。こういう社会システムがみたいなものが必要だし、もしかしたらそれは寺子屋とかローカル・コレクティブっていう言葉で表されるのかもしれないと思います。

井上 「コレクティブ」と言ってるのは、今までの「コミュニティ」とは違う成り立ちであることを強調したいからで、それはその人の日常の役割だけではなく、自らを解放できる、違う役割の場を用意しておくということなんでしょう。



その土地を引き受ける覚悟とその未来

井上 さて、プロジェクトも1年目が終わったところで、2年目はどこに力をいれていきましょう?

若杉 2年目はいよいよ共に作り上げていくチームづくりが始まっていくんじゃないかと思います。

井上 そうですね、企業の人たちも巻き込みながらコレクティブをつくり、実践的な活動に結びつけていけたらいいですよ。

若杉 そういう兆しはもう既にあるじゃないですか?来年度は、そこに賑わいや暮らしをつくっていくっていうふうになれば、小さなモデルが色々なところで起こってくる。そのプロセスにたくさんの人たちが参画してくれて、そのモデルを広げてくれれば、“Small Business, Big Relation”が出来上がるように思うんですよ。

井上 個人的には、これまで僕らが会って話を聞いてきた人たちの話を記録し、発表していくことにも挑戦したいですね。身体化した情報として可視化するみたいなことができたなら。

若杉 面白いじゃないですか、「世の中はこうなるのだ」という本じゃなくて、淡々と記録しているものの中に新たな未来が見えるっていう。それは井上さんにしかできないデザインかもしれない。僕は「未来洞察」って手法としてあるけれど、未来はシンクタンクや行政がつくるものではなく、俺たちだって未来の絵を描けるのだ、みたいなダイナミックな実践をどんどん形にしていきたいと思ってるんです。何か未来のようなものが見えてくると、みんながこぞって話し

始める、つまり表現をし始める。自分達が住んでいる場所に自己表現できる場をつくっていきたいんです。

井上 そうですね。手法としての未来洞察の問題点は、未来が何か括弧に入ったものになっちゃうってことなんじゃないかな。

若杉 連続してないわけだ。

井上 そう、現在と連続した未来を描ければいいんだけど。林業とかをやってる人たちが感じている未来って、何か遠くにあるものではなくて、まさに自分が引き受けてるその土地そのものというか、引き受ける覚悟そのものが未来なんだと思うわけ。

若杉 なるほどね、いいこと言います。

井上 自分の代でできないことは、次の代に託していく。引き受けて託すっていう、これが未来をつくっていくことかなと思う。そのため、私はここに根を張って生きていくんだって覚悟が必要だと思うんですよ。だけど、今はみんなそれが持てないから、地域の人たちも、ここが東京のようにならないかなとか、そんなことばかり考えちゃう。「一人一人が未来をつくれる」とは思えなくとも、何かを引き受けて生きていくというのは覚悟の問題だし、そういう覚悟を持つ人が増えると面白いことが起こるんだと思う。

若杉 それはいいと思います。そういうところにデザインが関われば、とても素敵だと思う。

政策のデザイン - フィンランドの事例から

行政が取り組む課題が複雑化しているなか、国内でも政策にデザインアプローチを取り入れる事例が増えてきています。ここでは、日本総合研究所とともに取り組んできた、「政策のためのデザインアプローチ」に関する共同研究について、岩嵯教授と、リサーチ当時フィンランド・アールト大学に在籍していた森研究員が、フィンランドでのリサーチから日本への示唆を探ります。

武蔵野美術大学 教授

岩 嵯 博 論

武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所 客員研究員

森 一 貴



フィンランドにおける政策のためのデザイン

岩 嵯 ムサビのソーシャルクリエイティブ研究所（以下 RCSC）には 3 つの領域があります。「地域」「教育」そして「政策デザイン」です。僕のゼミではテーマを 3 つ掲げてて、それが「ストラテジックデザイン」「ソーシャルイノベーション」「政策のためデザイン」なんですね。政策のためのデザインと、この RCSC の政策デザインなどの活動がオーバーラップしていて、いろんなご縁で昨年から日本総合研究所とこのテーマで共同研究することになりました。実はリサーチ先の候補はいくつかあったのですが、そういえばフィンランドに森さんがいることを思い出して、ぜひリサーチと一緒にやりたいと思ってお声がけしたというのが経緯です。実際には「フィンランドにおける政策のためのデザインのエコシステムを探索する」というテーマで、去年の 8 月にフィンランドで一緒にリサーチを行いました。

森 実際には 6 月ぐらいから、まずフィンランドでデザインを活用している機関をリストアップすることから始めました。行政から民間までかなり色々なレベルでリサーチかけて、行政そのもの以外にも、Forum Virium Helsinki といった第 3 セクターのようなものもあったし、色々なアクターから総合的に政策デザインのあり方を見つめた時に、どんな全体像が見えてくるんだろう、ということでリサーチをやってきました。結果的にフィンランドをフィールドにしてとても良

かったんじゃないかなと思うのは、フィンランド、特にヘルシンキ都市圏はとても小さいので、全体像が良く見えるんです。

岩 嵯 確かに、それはありますね。

森 例えば大学や民間のデザインファームのなかで、デザインがどのような役割を果たしながらエコシステムを形成しているのかが見えてきたんです。あと、フィンランドは行政の中にとっても優秀な人たちがたくさんいるので、修士号や博士号を持ってる行政の中の人たちが、外部のデザインファームと協力しながら、デザインとイノベーションをガンガンリードしているというのが、個人的に面白かった点ですね。

岩 嵯 そうですね。今回、ヘルシンキとその隣にあるエスポー市を見に行ったんですが、基礎自治体にあたる行政ユニットがあって、その周辺にシンクタンクがある。シンクタンクも、国がやっている Sitra のようなシンクタンクもあれば、ヘルシンキ市がやっている Forum Virium Helsinki、民間でグローバルに活動している Demos Helsinki のようなシンクタンクもある。そういう人たちがいるなかに当然大学もあり、民間のデザインファームがある。リサーチのなかで総勢 10 数名の方にインタビューしましたが、そのエコシステムの全体像が見えたということが良かったですね。

メディアエ이터としてのデザイナー

岩 嵯 インタビューの中で出てきた興味深いキーワードとして、「メディアエ이터としてのデザイナー」というキーワードが、何人かの人から出てきました。これはデザイナーがある種の狭義のデザインの世界で形をつくる力を発揮するだけではなくて、色々な人や組織の間に入っていった、その壁と壁を繋ぐ力を発揮して、本当にみんなが必要としているパブリックをつくるという。これはとても印象的でした。

森 僕もアールト大学の授業で、実際に政府系のアクターと一緒にサービスデザインのプロジェクトを実施してきました。その中で教授が何度も言っているのが、これまで出会うことがなかったアクターを同じテーブルに座らせる、これが実はデザインのすごく大きい役割の一つなんだということです。デザイナーは、参加者がある意味選ぶ力もあるし、それは権力でもあるんだけど、これまで出会うことがなかった人たちを同じテーブルにつかせることによって、これまで組織によって線が引かれていた人たちが議論して、同じ方向を向いてプロジェクトを進めていける。あるいはプロジェクトが成功しなかったとしても、お互いの立ち位置や政治性みたいなものを理解することができるっていうのは、フィンランドにおけるデザインの大事な役割として見られています。

岩 嵯 もう一つすごく印象的だったのは、「実験文化」みたいなものがあることです。とてもそれを象徴してたのは、Sitra という行政のシンクタンクがあって大きな予算を持っているんですが、彼らはその予算を小さなプロジェクトに分割していて、それはそれぞれ「エクスペリメントなんだ」と。そういうプロジェクトは 3 年や 5 年と期限を決めてて、やり続ける必要があれば他の組織にパスするけど、うまくいかないと感じたら即終了する。なんというか、スタートアップみたいにドラスティックに動いていて、それと行政っていう公的なものを両立している姿はとても印象的でした。

森 そうですね、行政の人たちも同じように言ってる人たちが多かったと思います。行政なんだけれども、私達がやることに失敗というものは存在しなくて、失敗も実は学習になるんだ、みたいなことを言ったりだとか。特に Forum Virium Helsinki の人たちは、「我々はヘルシンキ市の会社だけど、市とは違うから、市だったら失敗できないようなことをあえて失敗するために我々が存在するんだ」ということを言っていましたね。

岩 嵯 3 番目のポイントとして、僕は印象的だったのは人の流動性の高さ。これはフィンランドの社会の特徴の一つで、行政セクターにいた人が政府系シンクタンクに移るとか、民間セクターにいた人がシンクタンクに行って行政に来たり、しかも大学の学費がそんなにからないってこともあって修士号を 2 つ持ってるとかね。そうい



フィンランドでのフィールドリサーチの様子（2022 年 8 月）

う人が結構いて、流動しているからこそ知が転用されるようなところがあったと思うんです。

森 それはすごく感じました。僕のアールト大学の同級生でも 40 ～ 50 代の人が入って、もう既に博士号持っている人も入学してきていました。民間でも同じようにいろんな人が流動していて、だからこそ知識がどんどん蓄積されながら回っている。そういう良い循環が生まれているなと思っています。僕が特に印象的だったのは、ヘルシンキ市のウェブサイトのリデザインのプロジェクトで、それは行政の中の人々が外部のデザイナーを含めたチームをリードしていたんですが、そういうことが可能になるのは、行政の中の人々が民間のデザインファームでの経験があったり、あるいはデザインの修士号をもっていたりといった知識があったからだと思うんです。そういう人たちが日本の中でいるかなって思ったときに、なかなかいないなって思ったんですよね。日本もそうなっていただけたらなと思いました。

デザインが重視されるようになった社会的背景

岩 嵯 これはフィンランドの社会的な特性が関係していて、税金も高く、社会保障も厚い。公共にたくさんのリソースが集まっているのでそういうことがやりやすいところはあるのかなと思います。

森 なぜこのような社会になっているのかについては色々な理由が思い浮かんだんですけど、一つはフィンランドという国自体の「産業的な意味での競争力のなさ」。厳しい自然であったりだとか、工業的にも強いものがないという中で、ソフト面に投資するしかないっていう状況だったというのがあると思います。そういう背景のなかで、デザインやイノベーションというキーワードがフィンランドの中で重視されてきたという歴史的な側面があると思います。

岩 嵯 確かに、Nokia という携帯電話の会社がありましたけど、iPhone の登場とともに携帯ビジネスも駄目になっちゃって、日本でいえばトヨタ自動車も駄目になるぐらいのインパクトがあることが、国に対して起こった。その後、元 Nokia の社員の人がいろ



んなところに散ったんですね。危機感が一気に高まって、さらに人材がそれでいんなところに散って活躍するようになったという。

デザインの「虫の目・鳥の目」 - 日本の政策デザインへの示唆

岩 崙 フィンランドのことを特殊っていつてしまえばそうなのかもしれないけれども、学べることも多いんじゃないかと思っています。先ほどのメディアエーターの話とか、実験文化の話とか、人材の流動性みたいな話っていうのは、フィンランドの地域的な特性から出てくるものでもあるけれども、日本の社会にこれを適用することもできるんじゃないでしょうか。それを一つ象徴してるのが、デジタル庁。デジタル庁って、人材の流動化の話でいうと、一定割合の人がパートタイムの人で構成されていて、これは日本の省庁としてはありえなかったけども、政策的に意思決定があって、採用しようと決めてるからできてるんですね。だから、日本の社会でできないわけではないと思っています。

森 僕が関わってる福井県のプロジェクトでは、県庁のなかに未来戦略課っていう部門があって、そこが政策デザインを推進してるんです。そのチームは、なんか県庁で出島みたいなことやってるな、と思ったんです。日本の行政はまだまだ堅い部分が多いけれども、福井の未来戦略課は知事の理解があるポジションにいてるので、直轄の組織としてまさに出島のように県庁の課題と組織外のデザイナーをつなぐ役割を果たせています。まだまだ難しい部分はありますが、そういう形で自然に日本の行政の中に生まれつつある外と中を繋ぐ組織みたいなものが見えてきていて、そうしたところにフィ

ンランドの知見と響きあうものがあるように思います。

岩 崙 うん、そうですね、僕がフィンランドと福井県に共通性があると思ったのは、エコシステム的なものが福井でも形成されはじめているということです。これには色々な経緯があって、トップダウンでやろうというふうに人が言っても、そこに受け皿になれるデザインのプレーヤーがいないとできないですね。世界では狭義のデザインを内包する形で広義のデザインに拡張していつていますが、僕が福井に行って驚いたのは、広義のデザインの担い手が福井のエリアには結構いるということです。それがあったからこそ、トップダウンのメッセージを受け取れたっていう構造があったんだと思います。そういう意味で、僕らがフィンランドで見たようなエコシステムって福井にもでき始めているんじゃないでしょうか。

森 福井市から越前市までで、大体人口は40万人くらいですからね。

岩 崙 そうすると、ヘルシンキ市よりも少し小さい程度ですね。そういう規模感だからこそ、動きやすい。むしろそういう規模感のところから、新しいパブリックイノベーションが起きるんじゃないですかね。10万人から30万人くらいの都市こそ、そういうエコシステムが形成されやすいんじゃないかなっていう気はしてます。

森 それめちゃくちゃ面白いですね。僕がフィンランドに留学に行っ てよかったなと思ったのは、東京だったらそれぞればらばらの大きな業界みたいになってしまつてところが、フィンランドは小さいからこそ横で繋がっている。まさにエコシステムとして見えてくるっていうと

ころがあって、それは福井でも一緒なんですよ。福井って人口が少ない県だからこそ、デザイン事務所が一つあったら、そこが全部やんなくちゃいけない。それがいい意味で作用してて、狭義のデザインにとどまらず、商品開発も流通販路開拓も、あるいは地域の産業全体を見据えたプロジェクトもやらないとけなくなる。小さなデザインファームが、地域の色々なエコシステムを引き受けながらデザインしなくちゃいけないっていう背景があると思うんですね。だからこそ、政策デザインという広い目でいろんなことを考えながら取り組まないといけないっていう、その課題を引き受けるような下地ができてきているなと思っています。

岩 崙 僕はよく授業で、デザインの一つの特徴は「虫の目・鳥の目」だって言ってるんです。デザインは、虫の目を使って目の前にある課題をどう解決するかってことも当然できるけど、同時にすごく俯瞰したいいわゆる「ホリスティックビュー」を同時に用いるという、すごく特殊な職能なんじゃないかと思っています。今の話も、デザイナーやデザイン組織が地域の目の前にあるものをやりつつ、同時に地域全体を見渡すようなホリスティックビューを用いて両方でやってますよね。だからこそ、全体としての調和も取りつつ、個別の課題も解決できる。東京は全体が大きすぎるけど、30万人の都市圏であれば、全体を見渡した活動が可能になります。

新しい大学の役割

岩 崙 なぜデザイナーがメディアエーターになれるかっていうと、一つはビジョンを語れたり見せられたりするからだと思います。先ほどのホリスティックビューをベースにしなが全体を見渡すことができ、ここはこうだから、ここにこの人をくつつけるといいよねってなりますよね。もう一つは、言語も含めたビジュアル化する力をデザイナーは持っています。デザイナーは、いろんな形を使って「こういう世界になるといいよね」っていうことの提案ができるんですね。それをいろんな人に説明すると、「そうだね、確かにあった方がいいよね」と賛同を得られる、これがデザイナーがメディアエーター足りうる一つの側面かなと思います。

森 網の目としての存在の見方というものが、デザインの世界でも広がってきていると思うんです。それが実は、メディアエーターにとって大事な態度なんじゃないかなと思っていて、その地域の中にどこまでも広がっているような網の目...まさにこれってエコシステムのものの見方だと思うんです。行政、大学、地域産業、それが例えば流通の網の目まで広げると、地方から東京まで広がる。その網の目を、可能な限り引き受けながらデザインをしていくっていうのが、デザインの倫理としてすごく大事なことでと僕は思っているし、フィンランドではそういった態度を持っている人が多かったような気がしています。ある種そうした知を担い、態度を学べる場所が大学だと

岩 崙 大学は学びの場ですが、外に向けていろんな段階を持った接点をつくることというのは、新しい大学の役割です。ムサビのクリエイティブイノベーション学科でやってることや、RCSCでやってることも、例えばRCSCでもさまざまなイベントを開いていますが、それが最初の接点になったり、それが発展すると共同研究があったり、さらにやる気になつちやった人はムサビの学生になつちゃうとか。そういう意味で、アクセスがしやすい市ヶ谷にキャンパスを持っているというのは利点でもあります。

森 確かにそうですね。アールト大学はイノベーション大学として社会に資するという意識が非常に強い大学で、Nokiaショック後にどうやってフィンランドを立て直していくかという強い使命を負った大学でもあるんです。そういった中で、大学の教員は市の政策や、Oodi（ヘルシンキ市中央図書館）の参加型デザインのプロセスにも積極的に参画していたりだとか、実践的な役割を担っているということが見えてきます。また、地域に根を下ろしていると同時に、ミラノ工科大学と協働したりといったグローバルな研究知見を活用しながら研究活動をしているのがすごくいいことだなと思っています。大学が自分がある地域のエコシステムと、グローバルに開かれた知の流動の両方を引き受けながらそこにあるように思います。そういった知の蓄積のあり方が、日本でもどんどん増えていくといいですね。

本記事で、岩崙教授と森客員研究員が日本総合研究所と実施した共同研究に関して、RCSCでは今年3月に成果報告会を実施しました。イベント当日の様子はRCSCのWebサイトにレポートがまとめられています。こちら是非ご覧ください。

政策のためのデザインの現在形（2023年3月16日）

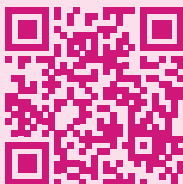




Convivi Lab

自律協生スタジオでは、月に1度外部のゲストをお招きして研究会を開催しています。ゲストの講義のあとは、本学の学生も交えての懇親会で親睦を深めます。こちらはどなた様でもご参加可能です。ご参加を希望される方は下記のQRコードからご連絡ください。

- 場所：武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス
- 参加費：無料（懇親会費別）
- 参加方法：下記 QR コードからお申し込みください



自律協生スタジオに関するお問合せ

自律協生スタジオの取り組みに関する
ニュース・お知らせは、Webサイトからご
確認ください。

<https://rcsc.musabi.ac.jp/convivi/>



自律協生スタジオ開設1周年記念

武蔵野美術大学 × 日本総合研究所 共同研究成果報告会

Convivial Design Forum - Fall Session -

「本領発揮のためのデザイン」

2023年11月10日 | 金 | 18:00-20:30

武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 5階

共同研究成果報告展

「本領発揮のためのデザイン」展

2023年11月10日 | 金 | -23日 | 木 | 10:00-20:00

市ヶ谷キャンパス 2階 共創スペース